広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第67号　2018　39－46

大学生の大学受験の捉え方と自己効力感の関連

堀　井　順　平
（2018年10月４日受理）

The Relationship between Perceptions of University Entrance Examination and Self-Efficacy in University Students

Junpei Horii

Abstract: This study aimed to confirm the relationship of perceptions of university entrance examination (PUEE) with generalized self-efficacy (GSE) and career decision self-efficacy (CDSE). In a preliminary study, 143 university students completed an open-ended questionnaire, and 44 items for a PUEE scale were extracted. In the main study, 273 university students completed a questionnaire. First, five factors and 29 items for the PUEE scale were extracted. The scale's reliability and validity were confirmed. Next, four clusters concerning PUEE and coping with university entrance examination (CUEE) were extracted: negative/balanced, positive/passive, positive/active, meaningless. Negative/balanced were negative concerning PUEE and both active and passive concerning CUEE. Positive/passive were positive concerning PUEE and passive concerning CUEE. Positive/active were positive concerning PUEE and active concerning CUEE. Meaningless had no meaning concerning PUEE and very passive concerning CUEE. Subsequent results of analysis of variance showed group differences in GSE and some aspects of CDSE. Results of Bonferroni multiple comparisons for the four clusters' means of GSE and CDSE were as follows. For GSE, positive/active students were significantly higher than negative/balanced and meaningless students, and positive/passive students were significantly higher than meaningless students. For self-evaluation, positive/active and positive/passive students were significantly higher than meaningless students. For goal selection, positive/active students were significantly higher than meaningless students. For planning, negative/balanced and positive/active students were significantly higher than meaningless students, and negative/balanced students were significantly higher than positive/passive students. For autonomy in decision-making, negative/balanced and positive/passive students were significantly higher than meaningless students, and positive/active students were significantly higher than the other three types of students. These results confirm the relationship of PUEE with GSE and self-evaluation, goal selection, planning, and autonomy in decision-making of CDSE.

Key words: perceptions of university entrance examination, generalized self-efficacy, career decision self-efficacy
キーワード：大学受験の捉え方，特性的自己効力感，キャリア選択自己効力感

問題と目的

大学生にとってのキャリア形成の重要性

中央教育審議会（2011）によると，キャリアとは「人が，生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」のことである。近年，学校教育を通じて，社会人・職業人としてのキャリア形成を支援していく必要性が指摘されている（中央教育審議会，2011）。特に，大学生は，学校から社会・職業への移行準備の時期であり（中央教育審議会，2011）大学卒業時のキャリア選択が人生の岐路となる重大な課題となる。よっ

て，大学生は大学在学中からキャリア形成を図ることにより，首尾よくキャリア選択を進め，大学卒業後の生活に備える必要がある。

大学生の特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と大学受験のとらえ方の関係

大学生のキャリアに関する研究において注目されてきた概念の１つとして，自己効力感が挙げられる。Bandura（1977）によると，自己効力感は「ある結果を導くために必要な行動に対する信念」と定義される。自己効力感の中でも，特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感は，キャリア選択に一定の影響を及ぼすことが明らかにされている。特性的自己効力感とは，具体的な個々の課題や状況に依存せずに，より長期的に，より一般化した日常場面における行動に関する自己効力感のことである（成田他，1995）。一方，キャリア選択自己効力感は Taylor & Betz（1983）によって，自己効力感の概念がキャリア選択・決定についての研究領域に持ち込まれたもので（浦上, 1995),「キャリアを選択･決定する過程で必要な行動に対する信念」と定義される。

過去の体験を捉え直すことが自己効力感の改善につながると安達（2006）や Chartrand & Rose（1996）は指摘している。また，Bandura（1995 本明・野口 1997）の「効力感の強さには，忍耐強い努力によって障害に打ち勝つ体験が要求される」という論述より，その経験の中での努力の程度も自己効力感を規定すると考えられる。そのような努力の指標として，ストレスフルと評定された状況を処理するための認知的・行動的努力（Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田 1991）を表す，コーピングが挙げられる。これらを踏まえ，堀井（2017）は，特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と大学受験のとらえ方や大学受験に対するコーピングとの関連について検討している。ここで，堀井（2017）は，大学受験のとらえ方を「現時点で, 自分の大学受験をどのようにとらえているか」と定義し，大学受験に対するコーピングを「大学受験に対する認知的・行動的努力」と定義している。そして，堀井（2017）は，大学受験のとらえ方と大学受験に対するコーピングの組み合わせによって，特性的自己効力感や一部のキャリア選択自己効力感の高さが異なることを明らかにしている。特に，大学入学以降でも変容可能な大学受験のとらえ方と特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感の関係に着目する場合，堀井（2017）では，大学受験を否定的にとらえている学生や，無意味な経験だとわりきってとらえている学生に対し，その経験のとらえ直しを促すことによって，特性的自己効力感や一部のキャリア選択自己効力感の向上につながる可能性が示されている点で一定の意義がある。

大学受験のとらえ方は特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と本当に関連するのか

しかし，堀井（2017）の研究は，大学受験のとらえ方が特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と関連する可能性を示すためのパイロット・スタディとして位置づけられる。大学受験のとらえ方の概念が特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と関連することを明確に示すためには，大学受験のとらえ方を測定する尺度を，堀井（2017）とは異なる角度から作成した上で，堀井（2017）の結果の再現を確認する必要があろう。堀井（2017）の「大学受験のとらえ方尺度」は，石川（2013）の「過去のとらえ方尺度」に基づいて表現を変えて作成されている。石川（2013）の一般的な過去のとらえ方には含まれていない，大学受験ならではのとらえ方があるかもしれないため，本研究では，大学生の自由記述を基に大学受験のとらえ方を測定する尺度を作成する。

本研究の目的

以上より，本研究では，堀井（2017）とは異なる項目で測定する大学受験のとらえ方（以下，大学受験の捉え方と表記する）の尺度を作成した上で，新たに作成した尺度で測定した大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの組み合わせによる，特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感の違いについて検討し，堀井（2017）と同様の結果が得られることを確認することを目的とする。

方　法

調査対象者

愛知県内の教員養成系大学１，２，３年生389名のうち，欠損値が見られなかった大学１，２年生273名を分析対象とした。

調査内容

１．大学受験の捉え方：大学受験の捉え方尺度の候補項目を収集するために，予備調査において，大学１年生から４年生143名を対象に自由記述調査を実施した。まず, 得られた424記述を分類･整理した。その際, 類似した内容の記述については１つの記述としてまとめた。また，一般的な大学受験のイメージについての記述や，大学受験に対する現在のとらえ方が反映されていない記述など，大学受験のとらえ方の定義にそぐわないと判断された記述については除外した。その結果,「苦痛経験」「無意味経験」「満足経験」「後悔経験」「連続的なつながり経験」「割り切り経験」の６カテゴ

リー77項目に集約された。続いて，心理学を専門とする大学教員１名と，心理学を専攻する大学院生３名および大学生２名の計６名で，内容的妥当性を検討した。その結果，カテゴリーと項目の一致率が83.3%未満の33項目が削除され，44項目が選定された。本研究では，これら44項目を，大学受験の捉え方尺度として使用した。「１．全くあてはまらない」から「５．とてもあてはまる」の５段階評定での回答を求めた。

２．大学受験を想起した時の情動の強さ：Nakajima & Muto（2006）をもとに，大学受験を想起した時の「嬉しさ」「誇り」「悲しみ」「抑うつ感」「怒り」「恥」をどの程度感じるかを尋ねた。この尺度を，大学受験の捉え方尺度の基準関連妥当性を検討するための，外的基準として使用した。Nakajima & Muto（2006）によると，受験経験を肯定的に評価する場合，正の情動は当初よりもより強く想起され，負の情動はより弱く想起されることを見いだしている。この知見に基づくと，大学受験の捉え方の肯定的な側面は，ポジティブな情動と正の，ネガティブな情動と負の相関関係を示すと予想される。また，大学受験の捉え方の否定的な側面の場合は，肯定的な側面とは逆の相関関係を示すと予想される。「１．全く感じない」から「５．非常に強く感じる」の５段階評定での回答を求めた。

３．大学受験に対するコーピング：久田・箕口・千田（1990）の尺度のうち，積極的に勉強に取り組む程度を表す「積極的対処」と，気晴らしや逃避，諦めといった対処を使用する程度を表す「受動的対処」の計15項目を使用した。各項目について，過去形で表記し，当時の大学受験生活を想起して回答をするように求めた。「１．そうしなかった」から「５．とてもそうした」の５段階評定での回答を求めた。

４．特性的自己効力感：三好（2003）の尺度を使用した。６項目で構成されている。「１．全く当てはまらない」から「５．非常に当てはまる」の５段階評定での回答を求めた。

５．キャリア選択自己効力感：花井（2008）の尺度を使用した。５下位尺度（「自己評価」「目標選択」「計画立案」「情報収集」「意思決定の主体性度」）の計25項目で構成されている。「自己評価」は自己を理解・評価することへの自己効力感，「目標選択」は将来の目標の明確化に関する自己効力感，「計画立案」は将来への計画を立てることへの自己効力感，「情報収集」は職業情報の収集への自己効力感，「意思決定の主体性度」は目標とする職業に対する粘り強い努力に関する自己効力感をそれぞれ表す。「１．自信がない」から「４．自信がある」の４段階評定での回答を求めた。

調査時期と手続き

2016年12月から2017年２月に集団単位による調査を実施した。実施に当たっては，「この調査は，コンピュータにデータ入力後，シュレッダーにて処分するなど，個人情報の保護に最大限の考慮をいたします。そのため，個人の情報や回答内容が特定されたり，外部に漏れたりすることは一切ありません」と教示し，倫理的配慮を行った。また回答は任意である旨を伝えた。

結果と考察

大学受験の捉え方尺度の因子分析

まず，予備調査で得られた44項目について，主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その際，全ての因子に.40未満の因子負荷量を示す項目と，２因子以上に.40以上の因子負荷量を示す項目を除外した。その結果，15項目が除外され，最終的に５因子29項目が抽出された（Table 1）。

第１因子は，「大学受験の経験は，今の自分の自信につながっていると思う」など，大学受験に対して達成感を抱き，自分の成長につながるものとしてとらえていることを表す項目で構成されている。よって，第１因子を「達成･成長経験」と命名した。第２因子は，「もっと早くから，大学受験について考えるべきだったと思う」など，大学受験に後悔していることを表す項目で構成されている。よって，第２因子を「後悔経験」と命名した。第３因子は，「大学受験を通して，自分にとって役に立つ力は何も身につかなかったと感じている」など，大学受験を意味のない経験としてとらえていることを表す項目で構成されている。よって，第３因子を「無意味経験」と命名した。第４因子は，「私にとって，大学受験は自分に嫌気がさした経験だ」など，大学受験を苦痛な経験だととらえていることを表す項目で構成されている。よって，第４因子を「苦痛経験」と命名した。第５因子は「『大学受験は過去のこと』と わりきっている」など，大学受験を遠い過去のこととしてとらえていることを表す項目で構成されている。よって，第５因子を「遠い過去の経験」と命名した。

大学受験の捉え方尺度の信頼性と妥当性の検討

大学受験の捉え方尺度の信頼性を確認するために，クロンバックのα係数を算出した（Table 1）。その結果，「遠い過去の経験」を除いて，十分な値を示し（α=.76～.92），一定の信頼性が確認された。「遠い過去の経験」については，α=.59 と値が低く，信頼性に乏しいと判断し，今後の分析から除外した。

次に，大学受験の捉え方尺度の基準関連妥当性につ

Table 1　大学受験の捉え方尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）

項　目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子　達成・成長経験（α=.92）					
16. 今の自分の進路を考える上で，大学受験は貴重な経験だったと思う	**.79**	.19	.09	−.01	−.01
36. 大学受験の経験は，今の自分の自信につながっていると思う	**.74**	−.10	.06	−.06	−.11
10. 大学受験を乗り切った自分を誇らしく感じている	**.74**	−.02	.12	−.06	.16
14. 今現在，自分の大学受験について，「やりきった」気持ちが強い	**.72**	−.22	.12	.06	.17
18. 今振り返ると，大学受験の経験は自分を強くしてくれたと思う	**.72**	.03	−.16	.04	−.10
8. 大学受験は，自分を成長させてくれた経験だと思う	**.72**	.15	−.12	−.07	−.03
38. 自分の大学受験は，努力が実った経験だと思う	**.71**	−.18	−.02	−.04	.15
12. これからの自分の人生の中で，大学受験の経験が役に立つはずだ	**.67**	−.05	−.09	.14	−.29
4. 大学受験は，自分の将来を考えるきっかけとなった経験だと思う	**.66**	.14	.05	−.02	−.06
27. 大学受験の経験は，今の自分の生活に活きていると思う	**.59**	.02	−.08	.04	−.12
31. 努力を続けることの大切さを学んだ点で，大学受験は貴重な経験だった	**.59**	.19	−.32	−.05	−.01
20. 今の大学生活に満足しているので，大学受験を頑張ってよかった	**.56**	−.20	−.03	.04	.22
第2因子　後悔経験（α=.87）					
23. もっと早くから，大学受験について考えるべきだったと思う	.24	**.82**	.12	−.09	.04
33. 今思うと，もっと必死になって大学受験に取り組めばよかった	−.07	**.77**	−.05	.05	−.02
28. 大学受験生活の中で，自分の将来についてもっと真剣に考えるべきだった	.03	**.74**	−.05	−.04	.07
41. 大学受験をもっと頑張ることができたと思う	−.04	**.69**	.00	−.17	.17
29. 今振り返ると，大学受験を甘く見ていたと思う	−.03	**.63**	.00	.08	.20
21. 大学受験の中で，勉強のやり方をもっと工夫すればよかったと思う	.18	**.62**	−.04	.15	−.07
2. もっとがんばって大学受験の勉強をしていたら，今よりも大学生活が充実していたと思う	−.10	**.60**	.04	.07	−.06
5. 大学受験に，心残りな気持ちがある	−.08	**.53**	.08	.09	−.23
第3因子　無意味経験（α=.80）					
39. 大学受験を通して，自分にとって役に立つ力は何も身につかなかったと感じている	.00	.05	**.86**	−.01	−.16
24. 今の自分にとって，大学受験の経験は役に立たない	−.16	.03	**.69**	−.05	−.01
37. 今の私にとって，大学受験はどうでもよい経験である	−.16	.08	**.58**	−.05	.07
30. 今現在，大学受験での出来事をあまり覚えていない	−.05	−.04	**.47**	.10	.02
第4因子　苦痛経験（α=.76）					
35. 私にとって，大学受験は自分に嫌気がさした経験だ	−.06	.04	−.10	**.78**	.13
40. 私にとって，大学受験は思い出したくない経験である	−.02	−.02	.14	**.73**	−.05
3. 自分の大学受験は，苦しいだけの経験だった	.05	.02	.01	**.61**	.12
第5因子　遠い過去の経験（α=.59）					
26. 「大学受験は過去のこと」とわりきっている	−.02	.09	−.04	.08	**.66**
11. 大学受験は遠い昔のことだと思う	−.05	.03	−.02	.06	**.55**
因子間相関　F1	—	−.22	−.63	−.17	.00
F2		—	.15	.39	−.18
F3			—	.31	.28
F4				—	.09
F5					—

いて確認するため，大学受験の想起時の情動の強さとの相関関係を検討した（Table 2）。その結果，「達成・成長経験」は「嬉しさ」「誇り」というポジティブな情動と有意な正の相関関係を示した。また，「後悔経験」と「苦痛経験」は「悲しみ」「抑うつ感」「怒り」「恥」というネガティブな情動と有意な正の，「嬉しさ」「誇り」というポジティブな情動と有意な負の相関関係を示した。さらに，「無意味経験」は「怒り」「恥」という一部のネガティブな情動と有意な正の，「嬉しさ」「誇り」というポジティブな情動と有意な負の相関関係を示した。これらの結果は，Nakajima & Muto（2006）

Table 2　大学受験の捉え方と大学受験の想起時の情動の強さとの相関係数

		大学受験の想起時の情動					
		嬉しさ	誇り	悲しみ	抑うつ感	怒り	恥
大学受験の捉え方	達成・成長経験	.55***	.59***	−.04	.04	−.07	−.16**
	後悔経験	−.27***	−.29***	.36***	.30***	.28***	.41***
	無意味経験	−.43***	−.38***	.04	.03	.14*	.18**
	苦痛経験	−.33***	−.31***	.39***	.49***	.44***	.33***

*$p < .05$, **$p < .01$, ***$p < .001$

の知見を概ね支持しており，大学受験の捉え方尺度に一定の基準関連妥当性が確認された。

各変数の基礎統計量

各尺度得点について，各尺度の項目の得点を加算し，項目数で除した値を尺度得点とした。各変数の平均値と標準偏差，および変数間の相関係数を算出したところ，Table 3のとおりとなった。

大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの組み合わせ

大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの組み合わせを抽出するために，大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの各下位尺度得点を標準化した上で，これらの下位尺度を投入変数として，クラスター分析（Ward 法･平方ユークリッド距離）を行った。３から５クラスターで検討し，解釈可能性から，４クラスターが妥当であると判断した。そこで，得られた４群を独立変数，大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの各下位尺度を従属変数として１要因分散分析を行った。その結果，「達成･成長経験」「後悔経験」「無意味経験」「苦痛経験」「積極的対処」「消極的対処」において，群間に有意差が認められた（順に F (3,269)=62.41,45.62,66.13,31.39,101.72,53.44, いずれも p<.001）。次に，Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，各群に異なる特徴が認められた（Figure 1）。

第１群は，「後悔経験」や「苦痛経験」が高いことから，現時点で大学受験を否定的にとらえている。また，「積極的対処」も「消極的対処」もやや高いことから，大学受験期にほどよく努力していた。よって，第１群を「否定・均衡群」と命名した。第２群は，「達成・成長経験」が高いが，他の大学受験の捉え方の得点が低いことから，現時点で大学受験を肯定的にとらえている。また，「消極的対処」がやや高いことから，大学受験期の努力は消極的であった。よって，第２群を「肯定･消極群」と命名した。第３群は，「達成･成長経験」が高く，「後悔経験」と「無意味経験」が低いことから，現時点で大学受験を肯定的にとらえている。また，「積極的対処」が高いことから，大学受験期の努力は積極的であった。よって，第３群を「肯定・積極群」と命名した。第４群は，「達成・成長経験」が非常に低く，「無意味経験」が非常に高いことから，現時点で大学受験を無意味な経験であったととらえている。また，

Table 3　各変数の基礎統計量

				大学受験の捉え方				コーピング		GSE	CDSE				
		M	*SD*	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
大学受験の捉え方	1 達成・成長経験	3.54	0.80	-											
	2 後悔経験	2.94	0.93	−.20***	-										
	3 無意味経験	2.12	0.79	−.64***	.19**	-									
	4 苦痛経験	2.20	0.90	−.18**	.35***	.28***	-								
コーピング	5 積極的対処	3.28	0.86	.58***	−.01	−.48***	.04	-							
	6 受動的対処	2.90	0.85	−.21***	.19**	.32***	.04	−.34***	-						
GSE	7 特性的自己効力感	3.19	0.85	.36***	−.23***	−.35***	−.24***	.37***	−.14*	-					
CDSE	8 自己評価	2.77	0.68	.24***	−.12*	−.24***	−.11	.27***	−.06	.45***	-				
	9 目標選択	2.61	0.80	.27***	−.15*	−.20***	−.04	.14*	−.09	.25***	.36***	-			
	10 計画立案	2.06	0.68	.25***	.01	−.17**	.09	.38***	−.05*	.34***	.38***	.39***	-		
	11 情報収集	2.48	0.71	.12*	−.00	−.11	.03	.19**	.10	.24***	.30***	.38***	.52***	-	
	12 意思決定の主体性度	3.03	0.70	.31***	−.24***	−.39***	−.12	.41***	−.32***	.42***	.38***	.44***	.33***	.36***	-

注.「コーピング」は大学受験に対するコーピング，「GSE」は特性的自己効力感，「CDSE」はキャリア選択自己効力感を表す。
$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

「積極的対処」が非常に低く，「消極的対処」が高いことから，大学受験期の努力は消極的であった。これらの特徴から，第４群は一貫して大学受験そのものを無意味なものとみなしている群といえる。よって，第４群を「大学受験無意味群」と命名した。

各群間における特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感の高さの違い

以上の４群を独立変数，特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感の下位尺度を従属変数として１要因分散分析を行ったところ，Table 4のとおりとなった。

まず，「目標選択」において，群間で５％水準の有意差が認められた（$F(3,269)=3.41$, $p<.05$）。続いて，Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，「肯定・積極群」が「大学受験無意味群」より有意に得点が高かった。高校時代に積極的に受験勉強に取り組むことや，大学受験を意味ある経験として肯定的にとらえることが，目標選択に関する自己効力感の向上につながるといえる。

また，「自己評価」において，群間で１％水準の有意差が認められた（$F(3,269)=4.74$, $p<.01$）。続いて，Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，「肯定・消極群」と「肯定・積極群」が「大学受験無意味群」より有意に得点が高かった。たとえ大学受験期の努力が消極的であっても，大学受験を意味ある経験として肯定的にとらえることが，自己評価に関する自己効力感の向上につながるといえる。

さらに，「特性的自己効力感」「計画立案」「意思決定の主体性度」において，群間で0.1%水準の有意差が認められた（順に $F(3,269)=10.83, 6.07, 18.15$, いずれも $p<.001$）。続いて，Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，以下のような結果が得られた。

「特性的自己効力感」については，「肯定・積極群」が「否定・均衡群」や「大学受験無意味群」より有意に得点が高く，「肯定・消極群」が「大学受験無意味群」より有意に得点が高かった。大学受験を否定的にとらえている，あるいは無意味な経験としてとらえている大学生は，その経験を肯定的にとらえ直すことにより特性的自己効力感の向上につなげられるといえる。

「計画立案」については，「肯定・積極群」と「否定・均衡群」が「大学受験無意味群」より有意に得点が高く，「否定・均衡群」が「肯定・消極群」より有意に得点が高かった。高校時代に積極的に受験勉強に取り組むことや，たとえ否定的であっても，大学受験を振り返ることが計画立案に関する自己効力感の向上につながるといえる。

「意思決定の主体性度」については，「肯定・積極群」が他の３群より有意に得点が高く，「否定・均衡群」や「肯定・消極群」が「大学受験無意味群」より有意に得点が高かった。高校時代に積極的に受験勉強に取り組むことや，たとえ否定的であっても，大学受験を

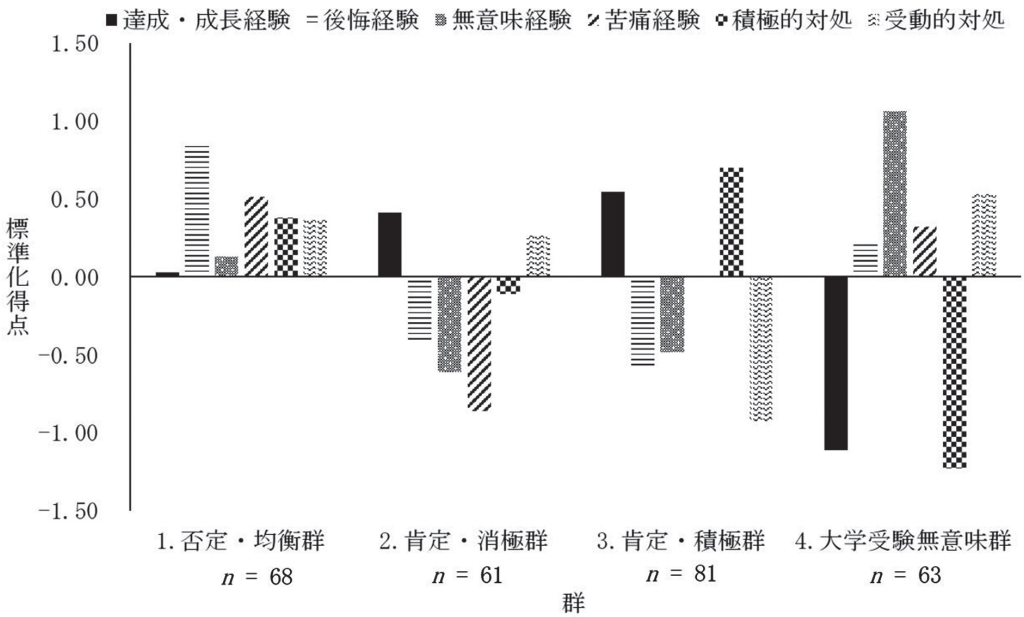

Figure 1　大学受験の捉え方と大学受験に対するコーピングの下位尺度の４群

Table 4　各群における特性的自己効力感およびキャリア選択自己効力感の下位尺度の平均値（*SD*）と分散分析の結果

	1.否定・均衡群	2.肯定・消極群	3.肯定・積極群	4.大学受験無意味群		
	n = 68	n = 61	n = 81	n = 63	F値(3,269)	多重比較
	M（SD）	M（SD）	M（SD）	M（SD）		
特性的自己効力感	3.04（0.65）	3.37（0.86）	3.50（0.84）	2.79（0.88）	10.83^{***}	1，4 ＜ 3；4 ＜ 2
自己評価	2.73（0.59）	2.87（0.64）	2.91（0.67）	2.52（0.74）	4.74^{**}	4 ＜ 2，3
目標選択	2.54（0.72）	2.72（0.83）	2.78（0.84）	2.39（0.75）	3.41^{*}	4 ＜ 3
計画立案	2.26（0.58）	1.96（0.64）	2.17（0.71）	1.82（0.70）	6.07^{***}	4 ＜ 1，3；2 ＜ 1
情報収集	2.52（0.58）	2.56（0.75）	2.39（0.69）	2.46（0.82）	0.76	
意思決定の主体性度	2.92（0.57）	3.11（0.59）	3.37（0.61）	2.60（0.77）	18.15^{***}	4 ＜ 1，2 ＜ 3

$^{*}p < .05$，$^{**}p < .01$，$^{***}p < .001$

振り返ることが意思決定の主体性度に関する自己効力感の向上につながるといえる。また，大学受験を否定的にとらえている大学生は，その経験を肯定的にとらえ直すことにより意思決定の主体性度に関する自己効力感の向上につなげられるといえる。

以上の結果は，大学受験の捉え方や大学受験に対するコーピングと特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感との関連を示しており，堀井（2017）の結果と概ね整合している。このことより，大学入学以降も変容可能な大学受験のとらえ方の概念に対する働きかけが，大学でのキャリア支援に一定の意義を有することが確認されたといえよう。すなわち，大学でのキャリア支援において，大学受験を否定的にとらえている大学生や無意味な経験としてとらえている大学生に対し，その経験を肯定的にとらえ直すように働きかけることが，特性的自己効力感や一部のキャリア選択自己効力感の向上につながるといえる。

まとめと今後の課題

本研究のまとめ

本研究では，大学受験の捉え方尺度を作成し，その尺度を用いて，堀井（2017）で示された大学受験のとらえ方の概念と特性的自己効力感およびキャリア選択自己効力感との関連を確認するために，大学受験の捉え方とコーピングの組み合わせによる，特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感の違いについて検討することを目的とした。

まず，５因子29項目から構成される大学受験の捉え方尺度が作成された。そして，「遠い過去の経験」を除き，一定の信頼性と妥当性が確認された。また，因子構造をみると，例えば，本研究の大学受験の捉え方尺度の「後悔経験」は，堀井（2017）の大学受験のとらえ方尺度の「否定的態度」と，大学受験に対する後悔を表す項目で構成されているなど，堀井（2017）と類似した部分もあるが，例えば，本研究の大学受験の捉え方尺度の「達成・成長経験」の中に含まれている大学受験に対する達成感を表す項目は，堀井（2017）の大学受験のとらえ方尺度の中には含まれていないなど，異なる部分もあり，本研究の大学受験の捉え方尺度は，堀井（2017）とは異なる視点で大学受験のとらえ方を測定する尺度といえよう。

そして，大学受験の捉え方とコーピングの組み合わせによって，特性的自己効力感と，「情報収集」を除くキャリア選択自己効力感の下位尺度に差異が認められ，大学受験を振り返ることや肯定的にとらえ直すことが特性的自己効力感や一部のキャリア選択自己効力感の向上につながることが示された。この結果は，概ね堀井（2017）の結果を支持しており，大学受験のとらえ方の概念と特性的自己効力感およびキャリア選択自己効力感との関連が確認された。本研究によって，大学でのキャリア支援において，大学受験のとらえ直しを促すことの重要性が強調されたといえる。

本研究の限界と今後の課題

本研究は，堀井（2017）と同様に，教員養成系の大学生を対象とした。今後，非目的養成系の大学生も対象とし，知見の一般化を図る必要がある。

また，大学受験のとらえ方の概念が特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感と関連することが示されたが，その規定因にまで言及ができなかった。大学受験のとらえ方の規定因の検討は，特性的自己効力感やキャリア選択自己効力感の向上のためのアプローチの開発に寄与すると考えられ（堀井，2017），大学でのキャリア支援に一定の意義を有するであろう。

【引用文献】

安達 智子（2006）．大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因　キャリア教育研究，**24**，1-10.

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York : Cambridge University Press.（バンデューラ，A. 本明 寛・野口 京子（監訳）（1997）．激動社会の中の自己効力　金子書房）

Chartrand, J. M., & Rose, M. L., (1996). Career interventions for at-risk populations: Incorporating social cognitive influences. *The Career Development Quarterly*, **44**, 341-353.

中央教育審議会（2011）．今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm

花井 洋子（2008）．キャリア選択自己効力感尺度の構成　関西大学大学院人間科学，**69**，41-60.

久田 満・箕口 雅博・千田 茂博（1990）．大学受験生のコーピングとソーシャル・サポート　日本教育心理学会第32回大会発表論文集，**32**，478.

堀井 順平（2017）．大学受験のとらえ方およびコーピングの組み合わせによる自己効力感の差異－特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感に着目して－　発達心理学研究，**28**，133-143.

石川 茜恵（2013）．青年期における過去のとらえ方の構造－過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討－　青年心理学研究，**24**，165-181.

Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.（ラザルス，R. S.，& フォークマン，S. 本明 寛・春木 豊・織田 正美（監訳）（1991）．ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究－　実務教育出版）

三好 昭子（2003）．主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度（SMSGSE）の開発　発達心理学研究，**14**，172-179.

Nakajima, Y., & Muto, T. (2006). Impact of compensatory secondary control on the recollection of emotions and the self in respect to past adversity. *Japanese Psychological Research*, **48**, 46-53.

成田 健一・下仲 順子・中里 克治・河合 千恵子・佐藤 眞一・長田 由紀子（1995）．特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達的利用の可能性を探る－　教育心理学研究，**43**，306-314.

Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.

浦上 昌則（1995）．女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断－ Taylor & Betz（1983）の追試的検討－　進路指導研究，**16**，40-45.

（主任指導教員　児玉真樹子）